

八丈語談話資料にみられる対格標示の バリエーションと出現環境

——昭和55年度「各地方言収集緊急調査文字化原稿」を
資料として——

三 樹 陽 介

【キーワード】対格、膠着・屈折、談話資料、八丈語、三根方言

1. はじめに

本稿では、文化庁による「各地方言収集緊急調査」の談話資料を使用し、八丈島三根方言の対格標示のバリエーション（無助詞を含む）とそれらの出現環境について音韻的な面から考察する。

この談話資料は、昭和52～60年度にかけて文化庁によって行われた「各地方言収集緊急調査」の録音音声を文字化して談話資料として整備したものであり、成果の一部は後に『日本のふるさとことば集成』（国立国語研究所 2002～2004）として公刊された。『日本のふるさとことば集成』には八丈語三根方言は未収録であるが、昭和54～56年度にかけて調査されたときの録音データが手書きの文字化原稿とともに国立国語研究所に保管されている⁽¹⁾。本稿では、このうち昭和55年度の手書き原稿と録音データを資料に用いて分析を行なった。

助詞が名詞に接続する際、八丈語では一般に膠着によるが、一部の格は

(1) あわせて未テキスト化の録音データも保管されている。

名詞末母音と融合 (= 屈折)⁽²⁾し、表層形にバリエーションが現れる。特に対格である「ヨ格」と方向格である「イー格」⁽³⁾が接続する際、膠着だけでなく著しい屈折がみられ、本稿で扱う対格には6つの膠着・屈折パターンがみられる(金田 2001)。加えて、現代八丈語では、「オ格」(共通語のオ格に相当)の膠着や無助詞(ゼロ格)による標示がみられる。オの膠着や無助詞による対格標示は、翻訳式のエリシテーション調査ではあまりみられないが、自然談話ではごく普通に現れる。このように、伝統的な6つの標示形式に、新たに2つの形式が加わり、現代八丈語では、対格標示体系に変化が起きているとみられる。以上を踏まえ、本稿では、八丈語三根方言の談話資料を基に、名詞末音と、名詞末音との膠着・屈折を経た対格表層形との組み合わせパターンを計量的に分析し、対格標示の運用実態を音韻的な面から把握することを試みる。

なお、本稿では従来八丈方言と呼ばれていたことばを、消滅危機言語記述の観点から八丈語と呼んでいるが、表記上の相違であり、指し示す対象は同一である。また、特に指示のない限り、本稿の用例は前述の談話資料中の三根方言によるものである。

2. 先行研究

2-1. 東京都の方言区画と八丈語圏

東京都のことばは島嶼部の方言とそれ以外の本土の方言とにわかれるが、島嶼部伊豆諸島の中でも御蔵島と八丈島との間に大きな方言境界があ

(2) 金田(2001)では、名詞が文の中で文法関係を示すために格を伴い「みずからその形を変える」ことを「格による語形変化」=「曲用」としている。その上で、「八丈方言の名詞の曲用には膠着によるものと、屈折によるものがある」としている。

(3) 方向格には「イー格」のほか「ゲー格」「シャン格」など、複数の形式がみられる。



図 1. 東京都島嶼部方言区画図

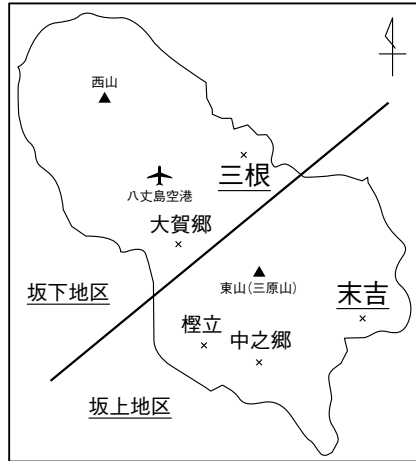


図 2. 島内集落図

り、八丈語と本土の東京方言を含むそのほかの方言とをわけている⁽⁴⁾。八丈語は御蔵島以北の伊豆諸島諸方言や本土の東京方言とは大きく異なるものであり、御蔵島以北の方言が本土東部方言の下位分類である関東方言に属するものであるのに対し、八丈語は、東部方言、西部方言、九州方言の大分類と対立し、日本語本土方言を構成する四大分類の1つとして扱われる(平山 1958)。さらに現在では本土系・琉球系と対立する八丈系として、日本語族を構成する三大語派の1つとして扱われることも増えてきている。

(4) 伊豆諸島の南方にある小笠原諸島でも八丈語は部分的に話されているが、英語・ハワイ(カナカ)語・日本語・八丈語のクレオールであることから、青ヶ島と小笠原諸島との間に方言境界が引かれる。

2-2. 八丈島について

八丈島は東京の南方沖約287kmに位置し、西山（八丈富士、854m）と東山（三原山、701m）の2つの火山が接合した北西-南東14km、北東-南西7.5kmのひょうたん型をした島である。面積は69.11km²で、山手線の内側とはほぼ同じである。行政区画では東京都に属し、無人の小島と本島の2島で1町を形成する。暖流である黒潮の影響を受けた海洋性気候で、「常春の島」とも言われている。

八丈島の集落は、かつて交通の難所であった大坂峠を挟んで坂上と坂下に2分され、さらに、坂下の三根・大賀郷と、坂上の檜立・中之郷・末吉の5集落に分けられる。2021年12月1日現在、約7,100人、約4,200世帯が暮らしているが、島外出身者も多い。人口の大半は坂下に集中しており、町役場や空港など、島の主な施設はこの地域にある。

八丈島には羽田空港から1日3便の航空便が出ており、片道1時間弱である。しかし、八丈島空港は接近が難しく、気象条件が揃わないと欠航も珍しくない。竹芝栈橋からは大型客船が1日1往復運航されているが、八丈島と本土との間には黒潮が流れているため⁽⁵⁾、片道10時間ほどかかる。

2-3. 八丈語および三根方言について

八丈語は萬葉集卷十四・二十にある東歌・防人歌との間に文法的共通点がみられることから、古代日本語東国方言の流れを汲むものであると考えられている（北条 1966、金田 2001、2011等）。東国方言は奈良時代には既に中央語から分岐していることから、八丈語もそれ以前に中央語と分岐したものであると考えられる。終止形と連体形が別語形であることなど、日本語祖語に通じる古い文法体系を維持している。

現在、八丈語は八丈町内の5集落に加え、青ヶ島村を合わせると6つの

(5) 八丈島はこの黒潮によって長年本土と隔てられてきたため、慶長5年に宇喜多秀家が配流されて以降、明治初期まで長らく流刑の地であった。

地域⁽⁶⁾で話されており、下位方言として坂下の三根と大賀郷、坂上の檜立と中之郷がそれぞれ小グループを形成し、坂上の末吉と青ヶ島がそれぞれ単独で対立する（金田 2001、2014）。集落ごとに語彙的・文法的な差異はある程度みられるが、特筆すべきほどのものではない。八丈語の下位方言の違いを特徴づけるのは音韻で、特に長母音・二重母音の現れ方や口蓋化の有無などに規則的な対応関係がみられ（金田 2001、2014）、下位方言はこうした音韻的特徴によって分類される。

2-4. 三根方言の音韻と方言差

短母音は標準語と同じ i、e、a、o、u の 5 母音だが、長母音は地区によって長母音のみの場合と、三根方言のように長母音と二重母音の両方が対立して存在している場合とがあり、地区ごとに規則的な対応関係がみられる。例えば、坂下の三根では kei（今日）、大賀郷では ke:、坂上の檜立・中之郷・末吉では ki: のように、ei、e:、i: が規則的に対応する。本稿で扱う三根方言には長母音と二重母音との区別があり、長母音 i:、e:、a:、o:、u: のほか、二重母音 ei、ou、ai、oi、ui が認められる。但し、長母音 a: と二重母音 ai、oi、ui は r の脱落による音韻変化を経た二次的なものであり、先述の地区ごとの対応関係からははずれる（金田 2001）。

三根方言では話者の内省から、長母音と二重母音との明瞭な対立が認められるが、実際の発話では両者の対立が明瞭ではないこともしばしばある。また、音韻解釈上は同一であっても、音声的に違いがみられることがある。

(6) このほか、小笠原諸島や沖縄県の南大東島等で移住した人々の子孫によって部分的に話されている。また、かつては八丈島の属島である八丈小島でも話されていたが、1969年に本島への移住事業が行われたため現在小島は無人となっている。しかし、八丈小島の鳥打・宇津木両地区の出身者が現在も八丈島本島に在住しており、かつての鳥打・宇津木両方言の面影をみることはできる。

2-5. 八丈語の対格標示のバリエーション

八丈語の対格はヨ格が膠着することで表示されるが、音環境により対格が前接名詞末母音と融合する、すなわち屈折することで、表層形に様々なバリエーションが現れる。金田 (2001) は、「ヨ格は名詞末母音との融合がいちじるしい。膠着の要素としては =jo となっているが、融合形においては、wo のまま融合を起こしたものが、wo>jo という変化ののちに融合をおこしたものは特定できない」とし、対格の融合を考える際、融合前の要素を wo と仮定し、三根方言の前接名詞末音と対格の融合パターンについてまとめている。表1は金田 (2001) をもとに古い八丈語における対格の出現パターンを整理したものである。

表1. 前接母音+ヨ格の融合例

短母音	-i + wo	-jo	umi + wo = umjo (海を)	融合/拗音	屈折
	-u + wo	-u:	mizu + wo = mizu: (水を)	融合/長音	
	-a + wo	-o:	na + wo = no: (名を)	融合/長音	
	-e + wo	-ei	sake + wo = sakei (酒を)	融合/二重母音	
	-o + wo	-ou	mono + wo = monou (ものを)	融合/二重母音	
撥音	-N + wo	-Njo	hoN + wo = hoNjo (本を)	撥音 + ヨ	膠着
長母音	-i: + wo	-i:jo	si: + wo = si:jo (椎を)	長音 + ヨ	
	-e: + wo	-e:jo	me: + wo = me:jo (前を)	長音 + ヨ	
	-o: + wo	-o:jo	ho: + wo = ho:jo (母を)	長音 + ヨ	
二重母音	-ou + wo	-oujo	hou + wo = houjo (方を)	ou + ヨ	
	-ei + wo	-ei:jo	rei + wo = rei:jo (礼を)	ei + ヨ	

表1をみると、対格直前のモーラが撥音 N や長音「i:」、「e:」、「o:」、二重母音の「ei」、「ou」など、いわゆる特殊拍の場合は後接要素として「ヨ」を取り出すことができ、名詞末音はそのままに、「ヨ」を膠着させたと解釈できる。金田 (2001) で述べられているように、wo のまま名詞末音と融合 (=屈折) し、その結果「ヨ」を含む形に実現したのか、wo > jo の

変化が先だったのかの判断は難しいが、現時点では、表層形の音韻上の解釈として、対格「ヨ」の膠着として整理する。一方、前接名詞末音が短母音の場合は複雑で、ヨ格(jo または wo) と融合することでそれぞれ著しい屈折⁽⁷⁾を起こすため、表層形はバリエーションに富んでいる。以上、対格標示には「ヨ」の膠着と合わせ6種の表層形パターンがみられる。

表1から、古い八丈語の対格接続のパターンは、①融合による拗音化(-i:)、②融合による長音化(-a, -u)、③融合による二重母音化(-e, -o)、④「ヨ」の膠着(-撥音、-i:、-e:、-o:、-ou、-ei)、の4つに整理することができる。④が膠着であるほかは、①～③は屈折による。

2-6. 例外の存在

しかし、現代八丈語の会話を観察すると、必ずしもこの対応関係に当てはまらないものもみられる。表2は、本調査で得られたデータから作成した、前接名詞末母音が「a:」「u:」⁽⁸⁾の場合の対格出現パターンを示したものである。長母音「a:」「u:」は三根方言では稀な音韻であるため、対格が接続する例は極めて少なく、「a:」については外来語である「レンタカー」の1語のみだった。「-a:」「-u:」は実際の会話では外来語などに現れるが、対格が後接する際には、新しい形式であるオの膠着や無助詞によって標示されている。

表2. 前接名詞母音が a:, u: の場合

長母音	-u: + wo	-u:o	nu:ɔ (縫う (こと) を)	長音+オ	膠着
	-a: + wo	-a:ɸ	reNtaka:ɸ (レンタカーを) ⁽⁹⁾	ɸ	無助詞

(7) -e, -oは元々の母音が残っているため、膠着要素として「イ」「ウ」を取り出すことができるが、対格は元々joかwoであることから屈折して二重母音ei, ouとして実現しているとみるのが妥当である。

(8) 金田(2001)には記載なし。

(9) 三根方言ではa:は原則o:になるため、外来語の例しかない。

2-7. 八丈語のゼロ格（ハダカ格）

金田（2001）ではゼロ格（無助詞による格標示）は「標準語のはなしことばにみられる、ガ格、ヲ格、ヘ格の代りがみられないため、標準語にくらべるとハダカ格の使用範囲はせまく、呼びかけ、数量、とき、ならべのまえ要素などでおもに使用される」と述べられており、古い方言では本来対格標示には用いられない。現代八丈語でも、文法記述調査では対格に限らず格が無助詞で標示されることはまずないが、しかし、普段の会話の中では無助詞で対格やその他の格が標示されることはごく普通にみられる。このように内省と実際の言語運用との間にはズレが存在する。

2-8. 諸方言の対格無助詞標示に関する研究

日本語諸方言では、主格や対格の標示形式に方言差があることは既に多くの研究で指摘されており、表層形に多くのバリエーションがみられること（小西 2015）や、弘前市方言のように、対格の基本的な標示形式が無助詞であるという方言もみられること（木部 2016a, b）が報告されている。また、対格がゼロで標示されることと関連性があるものとして、先行研究では、有生性（皆島 1993、竹内・松丸 2015）、動詞との隣接性（松田 2000）、限定性（皆島 1993、玉懸 2002）、代名詞（松田 2000）、情報性（Matsunaga 1988）などが指摘されている。いずれも文法的なものであり、本稿では取りあげないが、稿を改めて報告したい。

2-9. 格の二重表示

ところで、八丈語では、(1) (2) のような格の二重表示がみられ、対格が「の」と融合し、「ゴー」として実現する例がみられるが、厄介なことに「のは」も「のを」と同じように屈折を起こし「ゴー」という語形で実現される（金田 1993）。屈折して現れた場合、自然談話資料からは両者の判別が難しい箇所が散見されることや、そもそも助詞同士の融合という点で、対格と前接名詞の融合とは文法的に別の性質を持つことなどを考慮

し、本稿ではこれらについては分析の対象からはずし、名詞末音との融合にのみ焦点をあてて検討する。

- (1) ワイモ ウノー ホウバーノゴー ユキダン⁽¹⁰⁾ ンー ウイゴー
 私も あの 友達のところのを 行団 うん あそのを
 オー チート ツクリニ イッテノ (140-13)
 おー ちょっと 作りに 行ってね
- (2) ワガエデモ コナサマゴー タネガミ ニメーモ サンメーモ
 私の家でも 蚕のを 種紙 二枚も 三枚も
 ヤシナッテノー (10-2)
 養って

3. 資料概観

3-1. 談話資料について

本稿で使用するテキストは、文化庁による「各地方言収集緊急調査」のうち、昭和55年度の東京都八丈町三根方言調査録音の手書き文字化原稿である。「各地方言収集緊急調査」は、昭和52年度から昭和60年度にかけて、文化庁により全国規模でおこなわれた方言談話収録事業である。調査自体は、各都道府県教育委員会と連携の上、各地の方言研究者の協力により行なわれ、八丈町では昭和54～56年にかけて実施された。『日本ふるさとことば集成』（国立国語研究所 2002～2004）によれば「各地方言収集緊急調査」報告資料は、日本全国の47都道府県でそれぞれ5地点程度、計200地点あまりにおける、約4000時間にも及ぶ方言談話の録音テープと、その一部を文字化した原稿が残されている。（中略）膨大な資料を一気にデータベース化するのは困難であるので、段階的に公開を行なうことにする」とあり、この調査によって収録された膨大な録音テープと文字化原稿は、

(10) 人名。元青年団団長のあだ名。

10. 稲作の話

B. タツアニー、マニヤ アー キューコーデンニ ナツテ テツツモ
 達兄、今は 休耕田に いて ひつも

オー タバラオ ツクツテ オジャリンノー コンドウガ、ミツネ
 田圃を 作って いない ようだが、三根

ニワ ニシユーヨンチョーブ オークゴウニワ ジューハツチロウ
 には 24 町畝 ⁽¹⁾ 大塚郷には 18 町畝

ブト ユーノガ オジャロノオ キキートーガ、ムカシワア
 と 言うのが(田圃)あるのを 聞いておりますが、昔は ど

グンドー ツクリカタ シャツタロウノー、タバラオ、
 のどは 作りう(さ) ましたでしよう、田圃を。

A. ソゴンデ オジャルネー、マー タホリーテヤ ミツネデモ ホウ
 そうで すね、まあ 田圃りといえは 三根でも 大く

ケデ オジャロドウガ、ソレデー タオ オコシイタンダーノ、フ
 んで すが、それで 田を 起しきまよ、冬

ユノ アイダニネー、ソシテ ソレオー ガツコウノ コドモラ
 の 間 にね、そして それを 学校の 子供達

ニ イッシューマキ イクラテ ⁽¹⁾ ユーコトデ ウケサセタリナンカ
 に 一軒蒔き いくらと いうことで 請け寄せせたりはど

シータシテサ ホラセイテートグラ、ソイデ ハルサキン ナリ
 しましてね 振らせましたよ、それで 春先に ねり

イダスト、コンド オー タンホニ イネ イネオ マコートコウ
 まで、今度 田圃に ^x 稲を 蒔く 床を

ツクリイテテ エー ヨウサンオー ヤロー ソノ ナカデ、コ
 作りまして 養蚕を やっている その(種)中、

Na 137

図3. 「各地方言収集緊急調査文字化原稿」昭和55年度東京都八丈町の一部

のちに文化庁から国立国語研究所に移管され、2002年には『国立国語研究所資料集13-1～20 全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』全20巻（各巻冊子1冊A5判 約200頁、CD-ROM1枚、CD1枚）として刊行された。八丈語の談話資料は『日本ふるさとことば集成』には収録されていないが、この調査による三根方言の録音データと手書きテキストが国立国語研究所に保管されている。八丈語の手書きテキスト原稿は、昭和54・55・56年度の3年度分が残されており、うち、昭和56年度版はA・Bに分かれている。分量は各年度とも200頁程度である。文化庁（1977）によると、手書きテキスト原稿には正1部、副2部があるとのことだが、本稿ではこのうち昭和55年度の正の原稿を使用した⁽¹¹⁾（図3）。

3-2. 話者の属性

昭和55年度の録音は6名の話者によるもので、3つの組に分かれて採録されている。女性2名が1組、男性2名が2組である。6名とも両親が三根出身で、自身は三根育ちの生粋の三根方言話者である。Aは明治31（1898）年生まれで女性で主婦、半年間、東京での外住歴がある。Bは明治36（1903）年生まれで女性で主婦、60歳から7年ほど東京に居住しているが、家庭内では方言で会話が行われており、方言の特徴が濃厚で話者として適格との記述がある。Cは明治41（1908）年生まれで男性で、東京で勉学後、帰島してからは島の実業家として活躍した。D⁽¹²⁾は大正6（1917）年生まれで役場勤め、外住歴については特に記載がないことから、外住歴はないものと思われる。Eは大正4（1915）年生まれで農業、東京に2年ほど居住。Fは大正9（1920）年生まれで釣具店経営、南方や兵役で15年ほど島を出ていたが、「方言の話し手として適任」との記述がある。

(11) 54年度は八丈島での調査初年度であることからか、会話が弾まない部分が見られる印象だが、2年目の方がより寛いだ会話が豊富に収録されている。

(12) 55年度資料には両親出身地の記載がないが、54年度資料に記載あり。

3-3. 録音とテキストの概要

録音は昭和55（1980）年12月21日から23日にかけて行なわれた。それぞれ、21日に話者 A・B、22日に話者 C・D、23日に話者 E・F の自然談話収録が行われた。場所は三根にある民宿利平荘で、担当研究者は中本正智・高橋顕志である⁽¹³⁾。

テキスト1頁当たりの分量はカタカナ表記と共通語訳の対で13段26行（図3参照）、原稿は録音内容の説明（4頁）や注を加えて、全体で197頁である。

表3はテキスト部分を話者別、話題別に整理したものである。話題の数は全13話で、それぞれ2名の話者によって会話が展開されており、一方がもう一方の話者に発話を促す役割を担っており、もう一方がそれに応える形をとっているが、発話がどちらか一方に偏っているというわけではない。また、話者と調査者は同席しているが、調査者が話に加わることはなく、収録時の雰囲気は良好とのメモ書きがある。

表3. 話者とテキストの該当箇所と話題

話者	該当箇所と話題
A・B	1. 昔の生活、2. 着物について、3. 昔の着物、4. 結婚式について (以上、pp.1-29) 8. 正月の行事 (pp.100-125)
C・D	5. 道具、6. あわび、7. 家屋 (以上、pp.30-98)
E・F	9. 昔の仕事、10. 稲作の話、11. 女性の仕事、12. 釣りの話、13. 海での遭難 (以上 pp.127-192)

3-4. 文字化原稿の性格

全体的に音声に忠実であろうとする堅実かつ丁寧な文字化が行われては

(13) 全年度にわたり中本・高橋が担当しているが、56年度はこのほかに大島一郎、名嘉真三成が加わっている。

いるが、テキストには一部音声との齟齬がみられる。テキスト化の際の聴き取りが不正確だったと思われる部分や、聞き逃し、単純な記述の不備などがそのまま残っており、特に母音の聴き取り間違いや、長音と二重母音との書き分けが正確ではないところが散見される。もっとも、音声データを聴いても判別が難しい部分も少なからずあり、膨大な音声データをテキスト化するという事情に鑑みると、やむを得ないことだったかと推察する。しかし一方で、音声データでは明らかな長音であっても、音韻規則や文法的特徴から類推して恣意的に再建した二重母音で記述していると思われる部分もみられ、注意が必要である。また、共通語訳はほぼ逐語訳されているが、格や活用の訳し分けなどに齟齬があるところもみられる。このように、本テキストの取り扱いには慎重を要する。

4. 調査概要

用例採集に際し、本稿では対格を伴う名詞⁽¹⁴⁾を分析対象として設定した。名詞の後に助詞が続き、そこに対格が接続するものについては計量対象からは除外したが、必要に応じて適宜分析を加えた。用例は原則文字化されたテキストの記述に基づき採集したが、該当箇所については音声データを確認し、必要に応じて音声に合わせた修正を加えた。ただし、名詞末音の修正に傾注し、分析に関わらない部分については必要最小限に留めた。(3)~(6)は修正の一例である。

- (3) オチャー > オチョー 語末母音の修正 a > o: (115-9)
- (4) モンツケ > モンツキ 語末母音の修正 e > i (23-11)
- (5) カンモオ > カンモウ 語末母音の修正 o > u (154-10)
- (6) ムギゾーセーノ ゴンドーヤ > ヨ 語末母音の修正 a > o (116-4)

なお、先述のように、oo と o: や、母音の長短の識別は録音データから

(14) 動詞連用形の名詞用法は名詞に準じるものとして採集対象とした。

では判断が難しい部分も多く、修正は明らかな齟齬がみられる箇所にとどめ、テキストの記述を尊重することを原則とした。

用例採集の際、後続する動詞が「スル」「イタス」⁽¹⁵⁾などの場合、名詞 + ϕ + 動詞か、サ変動詞かで迷うところがあったが、その前後でサ変動詞として用いられているか、名詞として用いられているかを検討して判断した。(7)のように、原則、名詞が俚言形のもので、ほかに名詞として使用されている例がある場合はサ変動詞としては認めず、無助詞による標示として用例に加えた。一方で、(8)のように俚言形ではなく、ほかの個所でサ変動詞として使用されている例がある場合はサ変動詞として整理し、従って分析対象からは除外した。

(7) モヨクリ ϕ シテ (工夫(を)して) (49-13) 名詞として認定⁽¹⁶⁾

(8) コマシイタスドーテ(コマセますので) (183-12) サ変動詞として認定⁽¹⁷⁾

5. 調査結果

採集した用例は合計494例である。前接名詞末音に着目すると、1拍のものでは短母音の i、e、a、o、u と撥音、2拍のものでは長母音の i、e、a、o、u と二重母音の ou、ei、ai がみられた。

次に、対格標示形式を表層形ごとに分類すると、ヨの膠着、二重母音 ei、ou、長音形 i、u、e、o、拗音、拗長音への屈折、オの膠着、無助詞による標示、の合計11パターンが認められた。2節表1では、長音で実現されるものは o と u だけだが、本調査結果では、これらに加えて i、e⁽¹⁸⁾

(15) 八丈語で終止形はそれぞれ「ショウ」「イタソウ」

(16) 「モヨクリテ (工夫で)」(50-3)、「モヨクリシンジュージー (からくりシンジュー爺)」(147-4, 6) など、名詞としての用法多数。

(17) サ変動詞「コマシテ (釣りの寄せ餌をまくこと)」の用例有 (186-11)

(18) ei > e: という変化があったのか、音声実現上 e: に聞こえるだけか、いずれにせよ今後検証が必要である。

表 4. 談話資料にみられる対格標示

	数	%	名詞末音															
			i	e	a	o	u	N	i:	e:	o:	a:	u:	ou	ei	ai		
①拗音化	28	5.7	28	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	屈折
②長音化	110	22.3	2	24	37	42	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
③二重母音化	45	9.1	—	32	—	13	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
④-ヨ	25	5.1	—	—	—	—	—	9	1	3	7	—	—	3	1	1	膠着	
⑤-オ	183	37.0	57	34	23	28	11	7	—	8	2	—	2	—	3	8		
⑥ゼロ	103	20.9	24	21	9	18	13	1	—	8	8	1	—	—	—	—	φ	
合計	494		111	111	69	101	29	17	1	19	17	1	2	3	4	9		

がみられた。ただし、大半は e: と o: であり、u: については用例が少なく 2 例のみだった。i: については 1 例のみ、a: は用例がなかった。

表 4 は名詞末音と表層形タイプとの関係をまとめたものである。2 節の表 1 では、対格の接続パターンを、①融合による拗音化、②融合による長音化、③融合による二重母音化、④「ヨ」の膠着、の 4 つに整理したが、調査結果には⑤「オ」の膠着、⑥無助詞、がみられたため、表 4 では、これら 2 つを加えた 6 つに分類した。本調査で得られた用例にみられるものうち、膠着的要素は④「ヨ」、⑤「オ」で、これらと⑥無助詞を別にすれば、残り 3 タイプ／8 パターンは全て屈折により実現する。

6. 考察

以下、6-1 では名詞末音が 1 拍のもの、6-2 では名詞末音が 2 拍のものについて、それぞれ用例を名詞末音ごとに分けて分析する。用例のあとの番号は文字化原稿の頁数と行（段）数に対応している。6-3 では長音形、二重母音のバリエーションの検討、6-4 では新しい対格標示形式であると考えられる無助詞とオの膠着について取り上げ、6-5 では新旧対格標示の割合について分析し、6-6 では語彙ごとの分析、6-7 では話者による対格標示形式の偏りについて分析する。

6-1. 名詞末が1拍(短母音および撥音)のもの

6-1-1. 名詞末がiの場合

- (9) ムギ
- ^ヨ
- ツコガ ホネデノー。(134)

麦を 搗くのが 骨でね。

- (10) ソノ アビ
- ^ヨ
- モンデ カミヨーシャーテノー。(147)

その 苺を もいで 食べようとしてね。

- (11) フカキー ムグリ
- ^ー
- イタスダロー、ダラッタローガ (159-4)

深い 潜りを するでしょう、したでしょうが

名詞末音が短母音iの場合、(9)(10)のように屈折(-i + wo = -jo)を起し拗音化するが、拗音化した上で長音化もするものも2例みられた⁽¹⁹⁾。また、(11)のように長音i:に屈折するものもみられた⁽²⁰⁾が全111例中1例のみである。しかし、どちらも例外的なものであり、出現は極めて稀である。

6-1-2. 名詞末がeの場合

- (12) ミソー ツクルタメニ マメ
- ^イ
- フカシタリ

味噌を 作るために 豆を ふかしたり

- (13) ソユー ナベ
- ^ー
- カケテー シカクノ セイロデ

そういう 鍋を かけて 四角の せいろで

名詞末音が短母音eの場合、(12)のように屈折を起し二重母音化し、eiとして実現するが、一方で、(13)のように長音化するもの⁽²¹⁾も多数(24例)みられた。二重母音が本来の姿であるのに対し、それが二次的に長音へと変化したものと考えられる。

(19) オビョー(帯を, 27-1)、ソリョー(それを, 60-8)

(20) 金田(2001)では、末吉方言や青ヶ島方言ではi:になることが報告されている。

三根方言 -i wo > -jo hanasjo (話を)、末吉・青ヶ島方言 -i wo > -i: hanasi: (話を)

(21) 長音化するものは、話者C・Dでは前接名詞が1拍のものに限られるなど、話者による偏りがみられる。

6-1-3. 名詞末が a の場合

(14) オトコガ テンクソー トツテクロワ。(7-3)

男が 天草を 取ってくる。

名詞末音が短母音 a の場合、(14) のように屈折して o: として実現する (37例)。このほかに、オの膠着や無助詞で表示される例は多数あるが、o: 以外の形に屈折する例や、ヨが膠着する例はみられない⁽²²⁾。

6-1-4. 名詞末が o の場合

(15) ヤッパリ オメーガ イヤロゴン ネイトー カンモウ
 やはり あなたが おっしゃるように 煮えている さつまいもを
 アノ ヘツツイデ ノ オキリノ ウエイゲー ノツケテ (154-15)
 あの かまど × の 燻の 上へ 乗せて

(16) イトー ナベノ ナカエ イレズニ ソノカゴエ ニトツテ (17-10)
 糸を 鍋の 中へ 入れずに その籠へ 煮て

(17) アカヨオ ツリーイコージャ (188-6)
 アカヨ (魚名) を 釣りへ⁽²³⁾行こうよ。

名詞末音が短母音 o の場合、(15) のように、屈折して二重母音 ou で実現するものがみられる (13例) が、大部分の用例では (16) のように屈折はするものの長音化して標示された (42例)。前述の ei > e: と同様、ou > o: のように二重母音が二次的に長音化しているものと考えられる⁽²⁴⁾。

(22) ただし、(a) のように助詞が前接する場合は屈折を起こさず、ヨを膠着する。

(a) ヨシテルサンゲー サンジッセンツツカヨ ムローラーレ。(121-7)
 義照さんのところへ 30銭つつかを もらいました。

(23) テキストでは「に」となっているが、イー格であるので「へ」が正しい。動詞の目的形(名詞用法)は共通語では「に」で現われるが、三根方言ではイー格で現われるのが基本である(金田 2001)。

(24) 本稿では ou と o: の識別は原則テキストに従ったが、ou > o: への変化や、聞こえが o: であるが、話者内省は ou である可能性を検討する余地がある。

また、(17)のように、連母音の oo で発音されたところもあり、テキストでもこのような表記がなされているが、内省確認なしで談話資料から o: との区別を判断することは難しい。聞こえは o: でも、話者の内省は oo、ou というように、内省と実際の音声とのズレも考えられることから、談話資料の分析ではこれらを同定することには限界がある。エリシテーション調査で補う必要がある。

6-1-5. 名詞末が u の場合

(18) ソイゲ ミズー カケテ マタ カワカシテ (122-12)

それへ 水を かけて また 乾かして

(19) ソー モライユー シテ タレードーダラー (45-11)

そう もらい湯を して 盥だったでしょう。

(20) オユー イレトッテ ヒトリモ フタリモ サンニンモ ヘイロー

お湯を 入れている 一人も 二人も 三人も 入る

モンドーダラー (46-3)

ものだったよ。

名詞末音が短母音 u の場合、(18)~(20)のように屈折して u: として実現するものは29例中5例のみであり、ほか24例は共通語的なオの膠着と無助詞によって標示された。

6-1-6. 名詞末が撥の場合

(21) フダンギニワ モメンヨ オーテ (20-12)

普段着には 木綿を 織って

名詞末音が撥音の場合、(21)のようにヨを膠着する(9例)。その他、オの膠着(7例)や無助詞で表示する例(1例)がみられたが、屈折を起こすものはなかった。

6-2. 名詞末音が長母音および二重母音のもの

6-2-1. 名詞末が i:, e:, o: の場合

- (22) ミンナ モチー⁽²⁵⁾ヨ キローヨ ホトケサマダー
 みんな 餅を 切ったのを ホトケサマだの
 カミサマダーニ アゲテサー (103-12)
 神様だのに あげてね

- (23) コノ イロリデサ ズゼーヨ ツルシテ (115-5)
 この 囲炉裏でね 自在鉤を 吊るして

名詞末音が短母音、あるいは撥音のものが複雑な屈折や膠着によって実現されているのに対し、長母音の場合は比較的単純で、ヨの膠着によって実現する。名詞末音が長母音 i:, e:, o: の場合は、長音はそのままに、ヨを膠着させる。このほか、オ格や無助詞で実現されるものも相当数あるが、いずれにせよ屈折は起こさない。なお、(24) (25) のように、拍数が短い(2拍)名詞の場合、ヨの膠着が避けられゼロまたはオで標示される傾向がある。

- (24) キゾメト カポーワ ヘーオ ツケトーダラ。(192)
 黄染めと 樺は 灰を つけたよ。
- (25) エーφ タテル ハナシノー。(84-9)
 家を 建てる 話ね。

6-2-2. 名詞末が a: の場合

- (26) ジブンシトリデ アソビニキテ レンタカーφ アー クルマφ
 自分一人で 遊びに来て レンタカーを あー 車を

(25) ヨに前接する「モチー(餅)」は長音形だが、イー格(方向格)などと融合したものではなく、共通語の「モチ(餅)」に対応する俚言形である(国立国語研究所1950)。

カリテ

借りて

名詞末母音が a: のものは先行研究に記載がないが、調査結果から、(26) の「レンタカー」1例のみ用例が得られ、無助詞により標示された。

三根方言の a: は r の脱落によるもの⁽²⁶⁾が主であり、r が脱落しない語形のものの方がより古いと意識されている (金田 2001)。事実、ひと世代古い方言を話しているとされる坂上では一般に r の脱落が起きにくい。また、三根では母音連続 aa は規則的に長母音 o: に変化するが、r の脱落の結果生じた aa は o: に変化することはなく、a: として実現する。このように a: は三根方言の音韻としては音韻変化の結果生じた二次的なものであり、その出現は極めて稀である。名詞末音が a: のものが無助詞で表示されるのは、そもそも名詞末の a: が非方言的であるためと考えられる。得られた用例も非方言的である「レンタカー」だけだった。

6-2-3. 名詞末が u: の場合

(27) ゲンノジョーヨ オンブシトッテ マダ ヌーオ

源之丞を おんぶして まだ 縫 (うこと) を

ホンナケ トキ (121-13)

知らない 時

名詞末音が長母音 u: の場合、(27) のように長母音はそのままにオが膠着することで実現される。名詞末音が u: の例は金田 (2001) をはじめ先行研究に記載がないが、調査結果からは 2 例が得られた。u: も a: の場合と同じで、共通語 (漢語) の u: に対応するものか、uo、uu からの変化に限られる⁽²⁷⁾ (金田 2001)。

(26) nomaraba > noma:ba 飲んだら、koqkara > koqka: ここから

(27) 「u:」 siNkeicu: 神経痛、cju:jo 注意を、「uo」 ju: 湯を (uwo > uo > u:)、kacu: 鯉 (kacu: > kacu:)、「uu」 su:rowa 飲む (すする) (金田 2001)。

6-2-4. 名詞末が二重母音の場合

名詞末音が二重母音のものは、ou (3例)、ei (4例)、ai (9例)、合計16例の用例が得られた。3種類とも、二重母音はそのままに、ヨまたはオが膠着する。無助詞標示はみられなかった。以上から、名詞末音が2拍のものは屈折しないといえる。

- (28) ホイデ コウコウヨ カタテニ ヒッカジリナガラ ガッコエ
 それで たくあんを 片手に ひっ鬻りながら 学校へ
 ツッパシローモンデオジャロドーダー。(154-6)
 走ったものでしたよ。
- (29) ジンジョー ロクネンセイヨ ソツギョーシトッター、
 尋常(小学校) 六年生を 卒業していて、
- (30) ワーガ ヨマー イコジブンジャ コンレイオ スーテッテ (23-9)
 私が 嫁へ 行く時分には 婚礼を するといって
- (31) ウチデ ヒヤクショーノ テツダイオ シルトカ ノー (5-9)
 家で 百姓の 手伝いを するとか ね
- (32) サンジューキューネンニ ツリノトモカイオ
 (昭和)三十九年に 釣りの友会を
 ケッセイシテオジャロドーガ (176-10)
 結成しましたが
- (33) ナミノ ジョータイオ ミテ ツリバエ オリロト (177-3)
 波の 状態を 見て 釣り場へ 降りると
- (34) イタイオ ミタローガ。(178-4)
 遺体を 見たでしようが。

6-3. 表層形が長音形や二重母音で現れるもののバリエーション

次に、対格標示の表層形別にみていく。屈折の結果、長音で標示されるものは、i: が1例のみ (35)、e: が4例 (36)、a: はみられず0例、o: が79例 (oa > o: 語末母音 a が37例 (37)、oo > o: 語末母音 o が42例 (38))、u:

が5例(内ju:が3例)(39、40)、だった。二重母音で標示されるものは、eiが32例(41)、ouが13例(42)、ooが1例(43)だった。eiは名詞末音がeの場合のみ、ouは名詞末音がoの場合のみにみられた。

- (35) オメーワ アノー イキガ ナガクオジャローテ フカキー
あなたは あの 息が 長くていらっしゃるので 深く
ムグリー イタスダロー ダラッタローガ (159-4)
潜りを するでしょう したでしょうが
- (36) オウダケー キッテ キテーテネー ヤマカラ (146-5)
大竹を 切って 来ましてね 山から
- (37) オー サカヤノ シタデ ムカシ ヤクボー シトードージャ。(24-13)
はい 酒屋の 下で 昔 役場を していたところだ。
- (38) ムカシワサー オメーロー アダンドー ヘビロー キヤロードー(23-7)
ムカシワさ あなた方は どのような 着物を 着なさいましたか。
- (39) ソイゲ ミズー カケテ マタ カワカシテ ソゴンシトッテイ(122-12)
それへ 水を かけて また 乾かして そうしておいて
- (40) ソー モライユー シテ タレー ドーダラー。(45-11)
そう もらい湯を して 鹽 だったでしょう。
- (41) シタノ ホーニワ イカメイ ツケテ、(171-6)
下の 方には 烏賊を 付けて、
- (42) ウイカラ オジヨーテ ユー ネーコケ ヨノコウ ツッテ (169-5)
それから オジヨと いう 小さい 魚の子を 釣って
- (43) トビメト オー アカヨオ ツリーイコージャ (188-6)
飛び魚と おー アカヨを 釣りに行こうよ

6-4. 「オ」の膠着や無助詞による対格標示の出現環境

新しい対格標示形式であるオの膠着や無助詞による対格標示は、全用例の半数以上を占める。これらは、共通語の対格標示形式による置き換えとみられ、本来非方言的なものであるが、実際の方言運用の場では頻繁に出

現する。全494例中、オの膠着によるものが183例（37.0%）、無助詞標示が103例（20.9%）、合計286（57.9%）がこれらによる標示である。

6-4-1. 「オ」が膠着するもの

- (44) ソイデ ムスクビオ モシテサ ソノ ヨコッチョーデワ (64-4)
 それで 薪を 燃やしてさ その 横では
- (45) ヒノデオ マッテオジャリーイテートーダラ。(131-1)
 日の出を 待ちましたよ。
- (46) タバラオ ツクッテオジャリンノー ゴンドウガ、(137-3)
 田圃を 作っていない ようだが、
- (47) ソノ カンモオ ニロニ ウシヨガ ナクテ
 その さつま芋を 煮るのに 潮水が なくて (は)
 コマリイタソダー。(152-10)
 こまりますよ。
- (48) アノー アケテ ミズオ ハコボージャ。(44-3)
 穴を あけて 水を 運んだよ。

(44) は、原則的に名詞末母音が対格と融合 (= 屈折) して拗音化する⁽²⁸⁾ ことが想定されるが、こうした屈折を起こさず、「オ」を膠着させることで対格を標示している。(45)～(48) も同様で、本来名詞末音に従い屈折が期待されるが名詞末母音のバリエーションによって表層形が指定されることなく、従来の対格標示形式 (屈折) と置き換わる形で膠着要素として「オ」が現れている。

6-4-2. 無助詞による標示がなされるもの

- (49) アブキ \emptyset トル コツワ アロンドージャノー。(76-7)
 あわび (を) 採る コツは あるんでしょう。

(28) musukubi + wo = musukubjo

- (50) ミツネデ シマヅメ ϕ ソメロヒトワ ナッケッテノー
 三根で 島染 (を) 染める人は いないね
 マニャー。(20-3)
 今では。
- (51) テンクサ ϕ トリニ イコードーじゃ。ハマシヤン カケテ。(37-11)
 天草 (を) 採りに 行ったもんだ。浜へ 駆けて。
- (52) カモモノ ϕ カッデ ソイカラ ウシゴヤワ… (107-12)
 食べるもの (を) 食べて それから 牛小屋は…
- (53) オキチオバガ アロードーテノー コック ϕ
 おキチ婆が いたからね 台所仕事 (を)
 シテアロードーテ (25-10)
 していたので

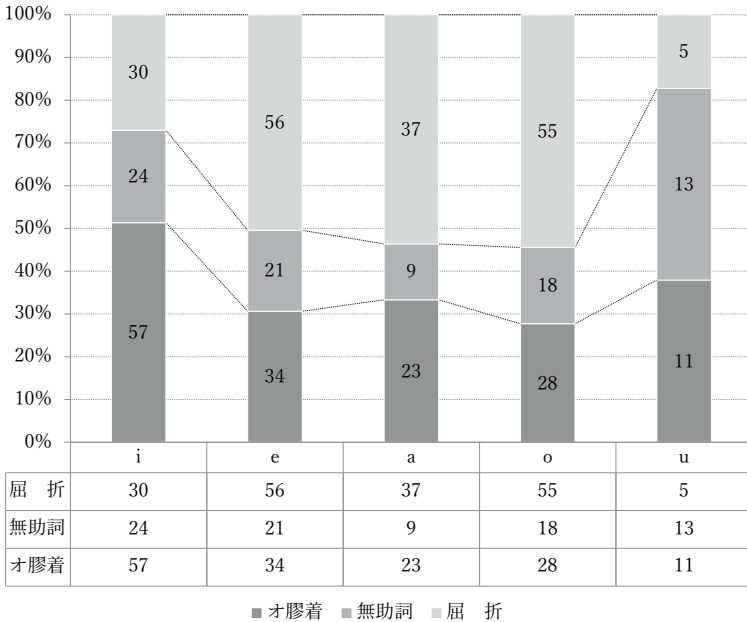
膠着にも屈折にもよらない対格標示形式に、無助詞標示がある。無助詞標示もオの膠着と同様、名詞末音のバリエーションによって制限されることなく、従来の対格標示と置き換わる形で現れる。これまで名詞末音ごとに異なる形式が分りふられていた対格標示が、新しい形式に一斉に置き換わっていると考えられる。

6-5. 新旧の対格標示の割合

表5は屈折による対格標示が期待される5つの短母音について、対格がどのような形式で現れるかを、屈折、オの膠着、無助詞標示の3つに分け、古い形式と新しい2つの形式の出現頻度を比較したものである⁽²⁹⁾。名詞末音が短母音のものの中では、uがオの膠着と無助詞標示で80%以上を占めており、以下、i、e、a、oと続くが、こうした置き換えが一番少ないoでも50%近くを占めていることから、自然談話では、屈折からオ格の膠着

(29) 長母音 i、o、u や二重母音 ou、ei、ai などは用例数が少なく実態を反映していない可能性があるため省略した。

表 5. オの膠着と無助詞による対格標示の割合



や無助詞標示への転換が進んでいるとみられる。言い換えれば、屈折による対格の実現が避けられる傾向がみられる。なお、オの膠着と無助詞を比較すると、オ格の膠着によるものがより多くみられる。

また、表5は名詞末母音の広狭が対格標示の転換の程度に関わっている可能性を示唆している。このデータを見る限り、名詞末音が狭母音であればオの膠着や無助詞標示など、新しい形式に転換する傾向が強く、広母音であれば比較的従来の形式を保ちやすい傾向にあるといえる。今後サンプル数を増やし、慎重に検証していく必要がある。

6-6. 語彙ごとにみる対格標示

対格標示は、同一個人であれば同じ語に必ず同じ形式を用いるというわけではなく、個人内でのゆれもみられる。通常、(54)~(56)のように同

一個人、同一語彙であっても複数の形式が混用されているが、原則古い形式が他の古い形式と混用されることはなく⁽³⁰⁾、新しい形式に置き換わるだけである。例えば、「ヨ」は「オ」と同じく前接名詞に膠着するが、屈折形式のものがオの膠着で現れることがあっても、ヨの膠着で現れることはない。同じように、膠着によるものが屈折で現れることもない。古い形式が新しい形式に置き換わる一方向的な変化である。

(54) 話者 F: 餌を エソー (174-3) / エサオ (162-13)

(55) 話者 B: 蚕を コナサモー (6-10) / コナサマ ϕ (10-7)

(56) 話者 C: 魚を サカノー (68-10) / サカナオ (70-13)

6-7. 話者による特性 (共通語化の傾向)

表6はオの膠着と無助詞による対格標示の割合を話者ごとに示したものである。無助詞やオの膠着は話者 A・B で少なく、話者 C・D・E・F で多いことから、性差と世代差、職業差がある可能性がある。どの要因が作用したものは、本調査のデータだけでは判然としないが、複合的に作用していると考えられるべきであろう。

6-8. 考察のまとめ

本稿で明らかとなったことは以下の通り。

名詞末音と表層形との関係は変容することなく、古い形式はある程度維持されているが、一方でそれは多くの場合、新しい形式に置き換わることで失われつつある。原則、元の規則を維持するか、オの膠着・無助詞に転換するかの2択だが、名詞末音が短母音のものは、全体として長音で実現

(30) ただし、二重母音が長母音として実現されているケースがみられ、テキスト・音声両面から長音として認められるが、話者の内省では二重母音として発音されている可能性も否定できない。この点については資料からは検証不可能であるため、本稿ではテキストに従い、それ以上は論じない。B: 鍋を ナベイ (115-6) / ナベ \bar{e} (101-1)

表 6. 話者ごとに分類した無助詞標示の割合

話者	対格 総数	無助詞		オ格		無・オ 合計の割合	生年	性別	職業
		総数	割合	総数	割合				
A	102	26	25.5%	19	18.6%	44.1%	M31	女性	家事
B	70	12	17.1%	12	17.1%	34.3%	M36	女性	家事
C	109	24	22.0%	62	56.9%	78.9%	M41	男性	電気器具商
D	27	11	40.7%	7	25.9%	66.7%	T6	男性	役場・農業
E	103	15	14.6%	50	48.5%	63.1%	T4	男性	農業
F	83	15	18.0%	33	39.8%	57.8%	T9	男性	釣具店

する方向に変化しつつあるものと考えられる。a、u は元々長音で実現されるが、e、o は表層形の二重母音が二次的に融合を起こし長音化する傾向にあり、表層形が二重母音 ei、ou にならず、長母音 e:、o: で実現されることがある。どちらも屈折であるという点では同じだが、融合後に ei > e:、ou > o: という変化を起こした二次的なものであるか、また、内省では二重母音である可能性もあるが、談話資料だけでは判然としない。

i についてもわずかだが、拗音化したものが長音化している例がみられる。名詞末音が i のもので拗音化しているものは、28例だったが、内 2 例は同時に長音化している。

一方、名詞末音が長音のものは屈折しない。従来は長音 + jo の膠着の形で実現されたが、この規則が適応されたのは13例のみで、残り28例はオの膠着、もしくは無助詞で標示される。元々の規則の適応率は31.7%と、半分未満に満たない。名詞末音が二重母音のものは用例数が極めて少ないため現時点では検討が難しいが、ou では全 3 例とも膠着規則を維持している。

名詞末音が撥音のものは52.9%が膠着規則を維持している。規則外のものとは共通語的なオを膠着するか、無助詞の形をとっている。屈折する例はみられない。

7. まとめ

本稿では、談話資料を基に、八丈語三根方言の対格標示形式の運用実態の把握を行なった。名詞に対格が直接接続する形式について用例を採集したところ、494例が得られ、計14通りの名詞末音（5つの短母音、5つの長母音、3つの二重母音、撥音）に対して、11通りの表層形バリエーションが得られた。表層形のバリエーションの内訳は、屈折によるものが8通り（長音 i:、e:、o:、u:、二重母音 ou、ei、拗音、拗長音）、膠着によるものが2通り（ヨ、オ）、加えて無助詞標示、の計11通りである。

全体として、複雑な屈折パターンをもつ表層形や、膠着できる前接名詞末音に制限のあるヨの膠着による対格標示の割合は多くなく、接続に条件制限のない新しい形式であるオの膠着や、無助詞による標示への転換が進んでいることがわかった。転換の程度は名詞末音によって差がみられるものの、旧体系から新体系への一方向的な変化（置き換え）であり、旧体系の諸形式間でのゆれは原則みられない。

談話資料は明治・大正生まれの話者によるものだが、こうした古い方言でも既にオの膠着や無助詞による標示が進んでいたことが明らかとなった。オの膠着や無助詞標示は、現在の八丈語の自然談話ではさらにその比率が高まっていることが推測される。

また、対格標示の形式変化の進度には、名詞末母音の広狭が関与していることがわかった。今後、他の年度の原稿や未文字化録音などをもとにテキスト量を増やした計量的な分析を行ない、より確実に実証を進めていく必要がある。

無助詞による標示は、膠着にも屈折にもよらないものだが、それが現れる環境や条件は、音韻とは直接関係がなく、本調査からは判然としなかった。前接名詞の性質や述語との関係により、出現程度に差がみられる可能性もある。解明は今後の課題とし、語彙的・文法的な面からの分析を検討している。

参考文献

- 阿部貴人 (2009) 「対話における無助詞化の地域差—東京・大阪・津軽方言の対照から」『月刊言語』38-4、pp.40-46
- 金田章宏 (1993) 「「二重」表示現象をめぐる一八丈島三根方言を例に一」『日本語の格をめぐる』くろしお出版
- 金田章宏 (2001) 『八丈方言動詞の基礎研究』笠間書院
- 金田章宏 (2011) 「八丈方言——古代東国方言のなごり」『日本の危機言語 言語・方言の多様性と独自性』北海道大学出版会
- 金田章宏 (2014) 「東京都伊豆諸島八丈方言」『文化庁委託事業報告書 危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究』琉球大学国際沖縄研究所
- 木部暢子 (2016a) 「対格表現の地域差 —助詞ゼロをめぐる一」東京外国語大学語学定例研究会資料
- 木部暢子 (2016b) 「諸方言コーパスに見る格と取り立て —九州方言を例に一」危機言語・方言研究発表会資料
- 金水敏 (1993) 「古典語の「ヲ」について」『日本語の格をめぐる』くろしお出版
- 小泉保 (2003) 『改訂音声学入門』大学書林
- 国立国語研究所 (1950) 『八丈島の言語調査』国立国語研究所報告 1
- 国立国語研究所編 (2002-2004) 『全国方言データベース 日本のふるさとことば集成』国書刊行会
- 小西いずみ (2015) 「広島市方言の対格標示：談話資料による計量的把握」『国語教育研究』56 pp.270-259, 広島大学教育学部国語教育会
- 斎藤純男 (2010) 『日本語音声学入門改訂版』三省堂
- 竹内史郎・松丸真大 (2015) 「本州方言における他動詞文の主語と目的語を区別するストラテジー」国立国語研究所共同研究プロジェクト研究発表会「日本語のアスペクト・ヴォイス・格」(2015年8月21-23日) 発表資料
- 玉懸元 (2002) 「仙台市方言における格助詞相当『ドゴ』の用法」『国語学会 2002年度秋季大会予稿集』pp.127-132
- 日本語記述文法研究会 (2009) 『現代日本語文法 2 第3部格と構文 第4部ヴォイス』くろしお出版
- 平山輝男 (1958) 「青ヶ島方言の所属」『國學院雑誌』59-10・11合併号
- 平山輝男編 (1965) 『伊豆諸島方言の研究』明治書院
- 文化庁 (1977) 「各地方言収集緊急調査実施要領」(国立国語研究所2002より)
- 文化庁 (1979) 『各地方言収集緊急調査文字化原稿〔正〕東京都(昭和54年度)調査地点八丈町』
- 文化庁 (1980) 『各地方言収集緊急調査文字化原稿〔正〕東京都(昭和55年度)調査地点八丈町』

- 北条忠雄 (1966) 『上代東国方言の研究』 日本学術振興会、丸善
- 松田謙次郎 (2000) 「東京方言格助詞「を」の使用に関わる言語的要因の数量的検証」『国語学』 51-1
- 皆島博 (1993) 「日本語の格助詞「を」の省略について—有生性と定性の関与の可能性」『言語学論叢 松本克己教授退官記念論文集』 pp.58-70
- Matsunaga Kiyoko. 1988. Case Deletion and Discourse Context. *Papers from the Second International Workshop on Japanese Syntax*, edited by W. J. Poser. Stanford: CSLI. pp.145-154.

参考 URL

- 八丈町 Web サイト <https://www.town.hachijo.tokyo.jp/gaiyo/gaiyou.html> (2021年12月1日最終閲覧)

『駒澤国文』の本号は、勝原晴希先生退職号となる。勝原先生には、私の本学着任から、コロナ禍下でのわずか2年間という短い期間ではあったが、学内業務を通じて、大学人としてのふるまい方をはじめ、多くのことを学んだ。もう少し仕事を一緒にできたらと願わずにはいられないが、本稿を以て、勝原先生へのお礼としたい。